

ひとり で 立つ

広岡キミエ



① はじめに

幼稚園教育の何よりの意義は、子どもに社会を与え、それを経験させることにあります。どんなに豊かで、教育的配慮も充分である家庭にも、これはなく、どんな貧しい幼稚園にも、これがありません。そうして、これが社会に生きる人間の人間を育てる最も重要なものです。——というようなことは、誰もが言い、誰でも知っていることです。ただ私は、保育の場で「社会」ということばに出あうたびに、頭の中で、一通りこの基本をおさらいしてでないと、足が前へ出ない癖があります。

——というのは、「社会」で学ばせようとするもの、という段になるとあまりに広汎でばらばらで、しかもなお、何かもの足りない思いがするので、その内容というのは、ある時は

- ・「望ましい日常生活習慣の躰」といったもののようであり、
- ・「集団生活の規則を守る事」みたいでもあり、
- ・道徳教育の萌芽として精神的なことが論じられることもあり、
- ・性格調査や、その矯正法みたいなものもあり、
- ・友だち関係や、それをうまくやっていく何か条かであったりもします。

これらはみな「社会」の内容であるし、みな大切で果したいことばかりです。しかし、現実にはどの一つでも容易ではないのに、なおこれをみな並べてみても、何か満足しないというのは何でしょう？

② 「社会」を学ぶ端緒

さて、お話を子どもの側に移しましょう。家庭という城壁の中

から這い出た子どもたちは、どのようにして社会を学んでいくのでしょうか。

① ひとりで立ち上る

・入園の最初の幼児の状態は、母親のひざからはなれて、またよたしながらもひとりで幼稚園にやってきて、わずかな間でも、母親との紐帯を断って、ひとりで他人の中に残った、という状態ではないでしょうか。

入園当初、四才児の受持は、「日本語が通じない」と驚きました。
・子どもの前に好きな玩具をおいて「遊びましょ」と誘ってみても、一回や二回では手を出さない。「立って」「坐って」という事でさえ、なかなか通じないかのように反応がおそい、というのです。

これはけっしてことばが通じないわけではありません。今までは母の袖のかげにいて、そこから外界をのぞき、母親を介してものを聞き、諸事母を通してまかなっていたのでした。それが、ここでは全く知らない他人のことばを、自分でじかに聞きとり、判断し行動するのです。ほんとうに聞くということが始まったのです。このことは小さなことではありません。大切な、自立の門出です。

② 他人に気づく

・ひとりの子が、せっせと積木をならべてレールをのばしていき
ます。後で、別の子がその端から一つ一つ積木をとって高い塔に

積んでいきます。全く別々、無縁の世界です。やがて、ふとお互いに気のつく時がきます。

・ふたりの子どもが、同時に、一冊の本がほしくなりました。両方からハッと手を出すとひっぱりっこが始まり、どちらもゆずりません。お互いは、「これは僕のだ」と思いこんでいるのです。家庭ではいつもそうでしたから、思いもかけない抵抗にあって、相手が見えます。こうしたようなことが、日に大小さまざまあつて、あの自分のことより他、何も考えられない子どもたちにも、少しずつ他人の世界が入ってくるのです。

③ 他者の中で自己を立てる

ここでいきなり、他人と仲よくとか、ゆずり合うとか、力を合わせてとか、一気におっかぶせては、少し飛躍が過ぎましょう。
「ひとさまのご迷惑になりますから」と歌のようにいって、何も知らない子どもが或る年いました。子どもにこういって訓す母親の顔が見えるような気がしました。まだまだ、ひとさまの事など思えるはずもない子どもに、こんなことばだけ教えてみてもむだです。何といってもまだ自己中心的な子どもたちです。今やっと、またまた立ち上りかけたばかりではありませんか。

しかし他者が見え出したのですから、これは大切に育てなければなりませんし、この他者との出あいには、危なっかしい自己の足もとをしつかりさせるのたいへん役立ちます。自分とちがうものにあつて、自分がくつきりします。そこで、「自分はこうだ」

と打ち出せるようになったら、これはたいへんしつかり立つこと
になります。

◎ 自己を確かに立てていくための保育

① 自分で遊びをみつげさせる

入園の最初、私たちはいろいろな玩具、材料を用意して子ども
が自ら手をのばして遊び始めてくれるのを待ちます。少したつ
と、いろいろの遊びの種になるものを用意します。それはいじつ
て遊べる小虫や、小さな営みをもつ小鳥や花や、その物語りなど
です。自ら選びとった遊びの中では、子どもはいつも主人公で
す。自主の人です。

② 表現活動を励ます

私たちの、聞いたこと、ふれたもの、感じたこと、何でも、み
な表現に出させます。「僕はこうみた」「こんな気持ち」「私はこ
う思う」と、ひとつひとつ出させていきますと、その対象がしつ
かり扱えられると同時に、自己というものも確かになっていきま
す。しかも、表現には、受け手が必ずありますから、それに認め
られるようになります。友だちや先生に解ってもらおうということが
要件です。認められるということは、裏を返せば、自分も受け手
になった時、その地点では、解って認めることができるというこ
とです。よく表現する子は、必ずよくみる子です。指導書のリ
ズム表現やお話の項に、「ひとの話をよく聞く……みる」など

とあるのは、けっして外形の問題ではありません。

③ 時々、大きい集団活動に参加させる

少しずつ自覚的に育ってきた子どもたちは、自由遊びにおいて
だんだん大きいグループ活動をするように成長してくるのが普通
です。（その最も美事な開花はおしばいごっことなるのですが）

が、その道程に、時どき大きい集団活動の場を計画して、子ど
もたちの社会性を強靱にするようにも考えています。数回の園外
保育や運動会というような全園あげての大集団活動はそのチャン
スです。そんな場で子どもたちがけっして自己を失わずに集団
に参加し、その上に大合奏の感激を味わい得るものとしたので
す。日々の集団降園などもまた、子どもがたいへん鍛えられる機
会です。もし子どもたちが自覚的でなかったら、都会地では、長
々と並んで歩くことなど、かえって危険でありましょう。こうし
て集団の中でも、個々はしゃんと生きており、喜んで規律に従う
ことになるのです。

◎ む す び

結局、保育の「社会」の場で、一番大事にしたいことは、自己
を立たせることです。

あの、ひよわい子どもたちが、しなだれかかったり、よっかか
ったりしないで、またまたしなながらも、ひとりです立とうとするの
を励ますことだと思います。

（大阪市立律吉幼稚園）